

阿岐のまほろば

Vol. 30

大規模な柱穴を発見!!

し せ き あ き こ く ぶ ん じ あ と さ い じ ょ う ち ょ う よ し ゆ き
史跡安芸国分寺跡 (西条町吉行)



▲^{どうばん}幢幡遺構と考えられる大形の柱穴

あ き こ く ぶ ん じ
安芸国分寺は奈良時代中頃に創建された寺院で、国の史跡に指定されていますが、古代の寺域は現在の史跡指定地よりも広いと予想されます。このため史跡内だけでなく、寺域を確認する目的で史跡周辺の調査も実施しています。

これまでの調査で、^{とう}塔・^{こんどう}金堂・^{こうどう}講堂・^{こんろう}軒廊・^{そうぼう}僧房などの主要な建物跡の位置や規模が明らかになりました。さらに、安芸国内の仏教全体を統括していた^{こくし}国師や、その後身の^{こうじ}講師が居住したと考えら

れる建物跡も確認されています。また、出土した多量の^{もっかん}木簡や^{ぼくしょ}墨書土器から天平勝宝二年（750）頃には^{ほうよう}法要を行っていたことがわかり、その内容も少しずつ明らかになってきました。

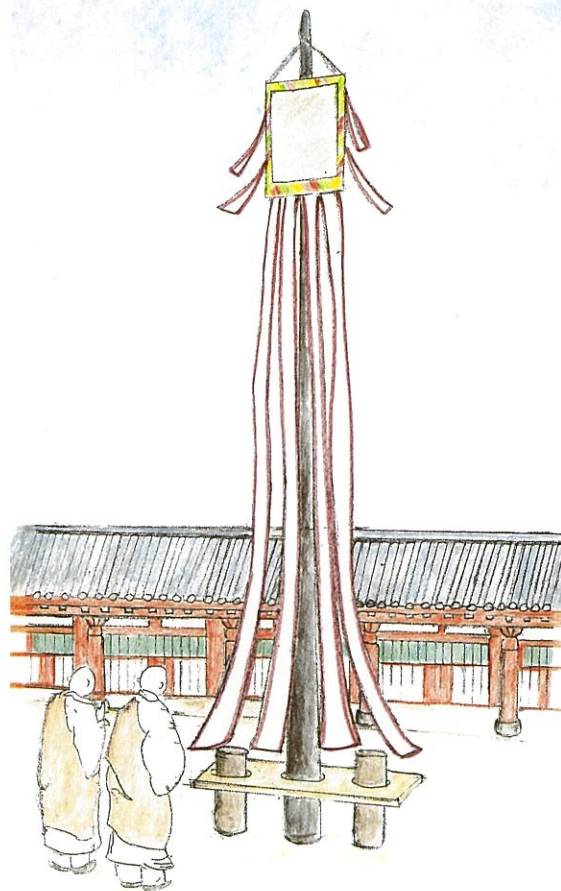
今年度の調査では、^{どうばん}幢幡遺構と考えられる遺構や、寺院の活動を支えたと考えられる建物跡群を確認しました。また、「^{その}蘭」と書かれた^{えんいん}墨書土器が出土し、国分寺周辺に^{えんいん}蘭院が存在した可能性が強くなりました。

大規模な柱穴の正体は!?

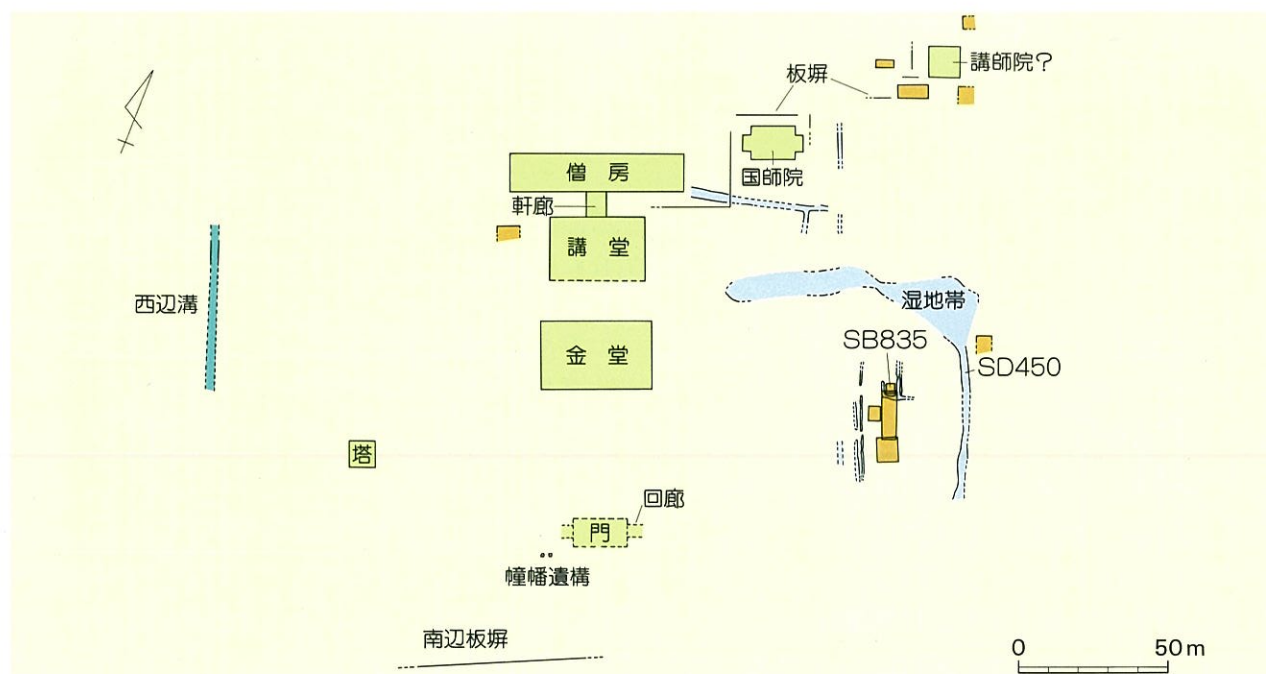
第19次調査は、未確認の回廊^{かいろう}の位置と寺域東側の状況の確認を目的として、平成15年6月9日から9月8日までの約3ヶ月間行いました。回廊は中門^{ちゅうもん}から東西に延びます。現在の國分寺仁王門^{こくぶんじにおうもん}付近が中門跡と推定されていることから、その西側を調査しました。その結果、回廊は見つかりませんでしたが、大規模な柱穴を確認しました。

大規模な柱穴は、東西に2基並んでいました。柱穴の大きさは一辺約1mで、深さは70～80cmです。やや方形気味の穴の中央には径30～40cmの柱の痕跡が認められました。また、土層を観察すると柱の周囲を丁寧に版築^{はんちく}し、柱を固定していることがわかりました。南北に対応する柱穴がないことから建物の柱穴とは考えにくく、西に柱穴が続かないことからすると塀^{へい}でもなさそうです。

寺院では、儀式の威容^{いよう}を高めるために幢幡^{どうばん}（旗のこと）で飾ることが行われていました。大形の柱穴は幢幡を取り付けた竿（柱）の穴、もしくはその両側に設けられた支柱の穴と考えられます。右の図は幢幡の想像図です。幢幡は、見る人に厳かで華やかな印象を与えたことでしょう。



▲幢幡想像図



▲古代の安芸国分寺の主要施設配置略図

たいしゅういん 大衆院を掘る!

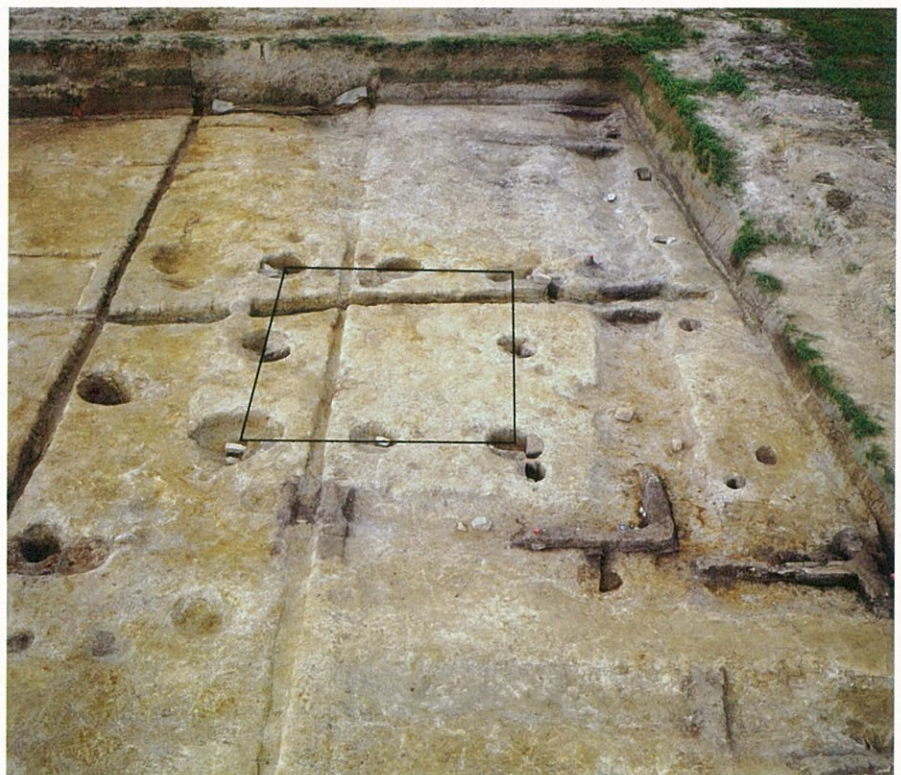
寺域東側については、平成12年度(2000)の調査で掘立柱建物跡を2棟検出しました。その東側には南北方向に延びる溝(SD450)があり、その溝から墨書土器が見つかっています。墨書きされた部分が一部欠けていて明らかではありませんが、「大衆」と書かれているようです。「大衆」は大衆院のことを示していると考えられ、寺域東側に大衆院があった可能性が高くなりました。

大衆院は、渉外・財政・寺の財産管理・人員管理・文書処理のほか、僧侶の食事や法会の準備などが行われるところです。金堂・講堂・塔などで宗教活動を行う一方で、同じ寺院内にこうした宗教活動を支えるために様々な施設がつけられました。大衆院はそのひとつで、これらの施設がなければ、寺院は維持できなかったことでしょう。

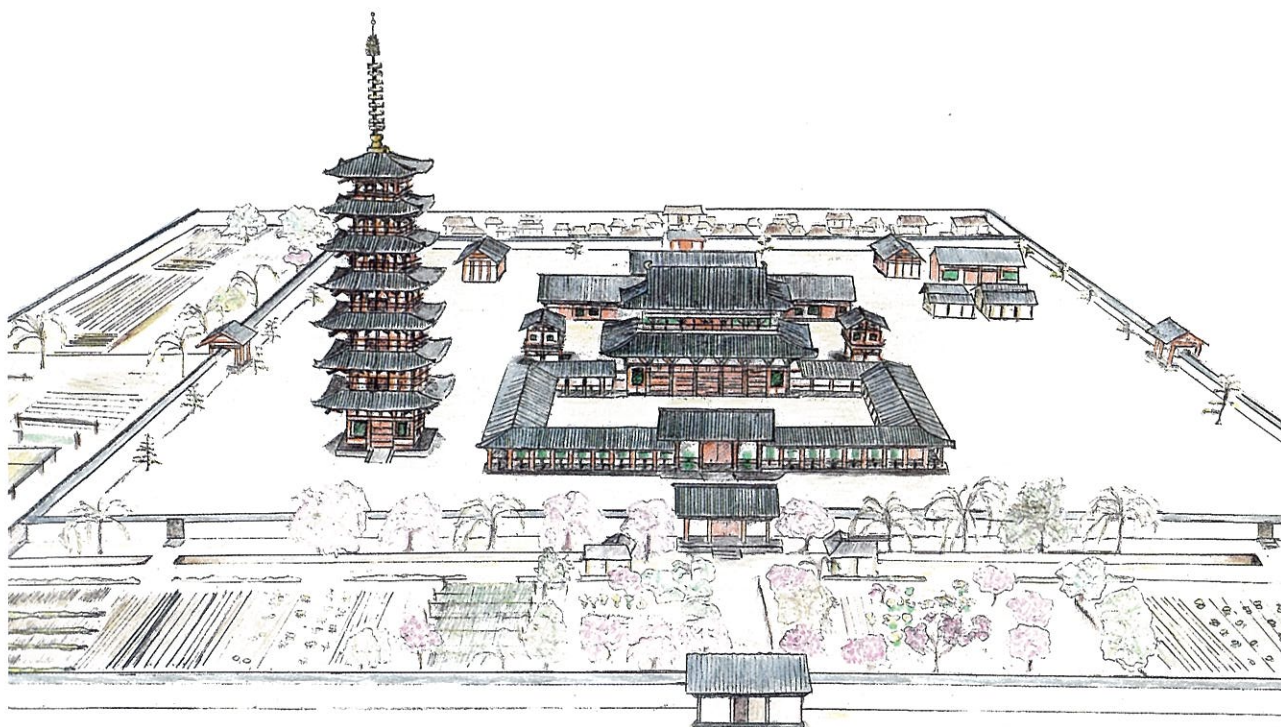
今回の調査ではすでに検出した2棟の建物跡の規模を確認するとともに、新たに建物跡を2棟確認しました。4棟とも南北に長い掘立柱建物跡です。最も規模の大きい建物跡は15m×4.5m(桁行7間×梁行2間)で、その大きさから倉のような建物と考えられます。また、西側に庇をもつ建物跡も確認されました。最も規模の小さい3.5m×2.5m(桁行2間×梁行2間)の建物跡(SB835)は周囲にあまおちみぞ雨落溝が廻っており、この雨落溝から「講院三」「講院」と書かれたものを含め、墨書土器が10数点出土しました。講院とは講師院の事であることから、この建物跡は講師院に関連した倉庫のような建物と考えられます。なお、溝状遺構が南北方向に延びており、排水とともに区画を意図したものと考えられます。



▲出土した墨書土器 寺域東側で出土した墨書土器の一部です。①は「大衆?」、②は「講院三」、③は「講院」、④⑤は「院」、⑥は「菌」と墨書きされています。②③は建物跡(SB835)の雨落溝から出土しました。



▲建物跡(SB835)と雨落溝



▲遠江国分寺の復元図 遠江国分寺は、伽藍地の外側に関連施設や園院があったと推定されています。古代の安芸国分寺の周辺にもこのように園院が広がっていたのでしょうか。(磐田市教育委員会蔵の静止画像を一部改変して使用しました。)

「園」があった?

寺域東側では多量の遺物が出土しています。今回出土した遺物には、瓦や土師器、須恵器、製塩土器、緑釉陶器があります。器種に注目すると、壺や甕などの日常雑器類が他の地点より多く出土し、製塩土器は寺域東側の限られた範囲でしか出土していません。これらのことは建物跡の存在とともに、寺域東側が大衆院として機能したことを示しています。

また「園」と書かれた墨書土器が出土しました。当時の寺院は僧侶の食べる野菜や薬となった果物、お茶などを栽培する園院と呼ばれる施設(畑)を備えていました。墨書土器に記された「園」はこの園院を管理していた事務所があったことを示していると考えられます。

古代の国分寺では20名の僧侶が生活しており、それを支えるために様々な建物が建てられ、人々が活動していました。今回の調査では、その一端を明らかにすることができました。

講師院を再検討中!

講師院と考えられる建物跡の再確認と、寺域北端の確認を目的に史跡指定地外の北側を、平成15年9月1日から12月4日まで発掘調査しました。

この建物跡は平成7年度(1995)の調査で確認され、周辺から「講師院」「講院」と墨書きされた土器が出土したことから講師院と考えられています。また、柱穴の配置から南北に庇をもつ構造と推定されていました。しかし、調査の結果、建物跡はさらに北に広がったことから、建物構造を再検討中です。

(文責 渡邊)

(財) 東広島市教育文化振興事業団 文化財センター報

阿 岐 の ま ほ ろ ば Vol. 30

発行日 2004(平成16)年3月26日

編集 財団法人東広島市教育文化振興事業団 文化財センター
発行 東広島市西条町大字馬木541-1
TEL 082-425-3880 〒739-0033

印刷 電子印刷株式会社
広島市中区堺町一丁目1-5